

HIV 検査や医療の現場で活躍できる通訳者を効果的に育成する方法の検討 ー通訳基礎トレーニング法の習得とロールプレイ演習ー

「在留外国人に対する HIV 検査や医療提供の体制構築に資する研究」班

研究分担者 宮首 弘子 杏林大学外国語学部教授
 沢田 貴志 神奈川県勤労者医療生活協同組合港町診療所所長
研究代表者 北島 勉 杏林大学総合政策学部教授
研究分担者 Tran Thi Hue 神戸女子大学文学部国際教養学科専任講師

研究要旨

2024 年はコロナ禍の影響から解放され、人々の経済活動や社会活動は元に戻り、人的国際交流も活発に成ってきた。政府観光局の発表によると¹⁾、2024 年の年間訪日外客数は 36,869,900 人で、前年比では約 47.1%増で過去最高を更新した。また出入国在留管理庁の統計によると²⁾、外国人新規入国者は 2023 年 12 月 2,639,542 人に対し、2024 年 12 月 3,313,484 人で約 26.6%増となった。それに伴い、令和 5(2023)年エイズ発生動向の発表によると³⁾、HIV 感染者の 20.6%、AIDS 患者の 12.0%が外国籍男性であり、外国籍男性のエイズ感染者は 6 年ぶりに増加し過去最多となった。

在留外国人や訪日外国人の増加に伴い、外国国籍を有する者に対する検査体制や受診しやすい環境の整備の一環として医療通訳のニーズが高まることが予期される。医療通訳の形態はコロナ禍前の対面通訳から、電話通訳、PC やタブレットを用いる遠隔通訳と多様化し、状況に応じて通訳形態を選ぶようになりつつある。したがって、対面と遠隔どちらの形態でも対応できる医療通訳者の養成がより重要度を増してきたと言える。

現状を鑑みると、医療現場を支える医療通訳者は必ずしも医療通訳士の資格を持っておらず、通訳トレーニングを受けて、通訳スキルを十分に持ち合わせているとは限らない。一方では、保健所の HIV 検査、とりわけ告知や治療につなげる場面においては、高い通訳力が求められる。そのため、研究班は HIV・結核に特化した感染症医療通訳研修を定期的に行うことが重要だと認識し、本年度も HIV・結核関連の専門知識の他、通訳スキルアップ講座と即戦力を高めるためのロールプレイ演習をリモート研修の形で行った。

本年度の感染症医療通訳研修は、前年度から引き続き大阪にある特定非営利活動法人 CHARM に実施を委託した。CHARM は HIV、結核の検査や診療における医療通訳を 15 言語で行っているので、研究班は CHARM と連携して、地域の医療通訳者の養成と質の向上に寄与するとともに、より効果的な医療通訳者育成法の開発につなげたいと考える。

研修は保健所、医療機関などから外国人の感染症患者（結核とエイズ）を支援するための通訳依頼を受ける可能性がある医療通訳者を対象とした。研修プログラムは近年増加している多様な言語に対応できる人材を養成するために日本語以外の言語を母語とする人々が参加しやすいように構成している。

感染症医療通訳研修は内容から大きく 2 部に分けられる。Ⅰ部は HIV・結核に関する医療知識、外国籍の者が利用できる医療保険制度などの座学である。Ⅱ部は医療通訳に必要な基礎トレーニング法の習得とロールプレイ演習による通訳現場力向上の受講者参加型の研修である。研修は 4 回にわけて ZOOM によるオンライン開催で実施した。

医療現場では相変わらず英語と中国語の需要が多いが、東南アジア言語のニーズの増加に通訳者の確保が追い付いていない現状を鑑み、本年度は研修の参加者募集をベトナム語、インドネシア語、ネパール語、ミャンマー語を優先することにした。研修内容は日本語以外の言語を母語とする人々が参加しやすいように、用語集の作成など通訳スキルの基礎から学べるものに設定した。本研究は 2 回目の医療通訳の基礎トレーニング法演習と 4 回目の HIV 検査のロールプレイ演習を扱う。

研究目的は、医療通訳に必要な基礎トレーニング法の習得という通訳スキルの向上、また、ロールプレイ演習を通して現場力の向上という二つの側面から検討することである。

研究方法は、通訳基礎トレーニング法の習得は、用語集の作成方法から、クイックレスポンスやノートテイキングなどの基礎トレーニング法を解説し、言語別グループ演習を通して習得してもらうものである。

ロールプレイ演習の場面設定は、HIV 検査と確認検査の告知の時の通訳。実施方法は医療者役と患者役は各言語のベテラン医療通訳者に扮してもらい、参加者には通訳を務めてもらう。スーパーバイザーは参加者の通訳力を評価し、指導を行う。本年度はベトナム語、インドネシア語とミャンマー語の3言語をグループ別にロールプレイ演習を行い、その他の言語の参加者は見学するという形を取った。

研修の評価は、受講後のアンケート調査から得られた参加者の評価とロールプレイ演習指導者であるスーパーバイザーの評価から効果的な研修になったかを判断する。研修後のアンケート調査の集計から、多くの参加者が研修前に既に通訳基礎トレーニング法を習得し、習慣化されているとはいえない現状が浮き彫りになった。同時に、研修で設けた各項目の学びについてはいずれも9割の参加者から良い効果があると認められた。

A. 研究目的

外国人の HIV 検査や受診のアクセス向上のため、現場で通用する医療通訳者の養成が必要不可欠である。しかし、これまでの研修後アンケートの回答から、通訳者に必須とされる基礎トレーニング方法のクイックレスポンス、ノートテイキングなどについて、知らない、もしくは聞いたことがある程度で、或いは知っているがあまり練習していない参加者が多いことが明らかになった。

また、在留外国人の約8割がアジア出身、20-30代が多いと言われている中、ベトナム語、インドネシア語、ミャンマー語のニーズが高まり、医療通訳の人材養成が追いついていない。

このような現状を踏まえて、今年度の研修は東南アジア言語のネイティブを優先対象として、より基礎的な通訳基礎トレーニング法の習得とロールプレイ演習を組み合わせた研修の有効性を検討するものである。研修参加者にとっては、必要な基礎トレーニング法の習得という通訳スキルの向上、また、ロールプレイ演習を通して医療現場での適応力の向上が狙いである。

B. 研究方法

1. 感染症医療通訳研修の内容構成

感染症医療通訳研修の内容構成と実施日程は下記の通りである。(表1)

●第1回「感染症医療の基礎知識」

・実施日時：

2024年9月23日(月祝)9:00~13:00

・受講者数：21名

・言語：

ベトナム語 5、英語 4、インドネシア語 2、ベ

トナム語/英語 2、インドネシア語/ジャワ語、シンハラ語/英語/ヒンディー語、タガログ語、ネパール語、ポルトガル語、ミャンマー語、韓国朝鮮語、中国語各 1

・研修内容：

1. HIV の基礎知識
2. 結核の基礎知識
3. HIV 検査の流れ

＊用語集についての説明、作成支援

●第2回「医療通訳基礎トレーニング法演習」

・実施日時：

2024年9月23日(月祝)9:00~13:00

・受講者数：18名

・言語：

ベトナム語 5、英語 4、インドネシア語 2、ベトナム語/英語、シンハラ語/英語/ヒンディー語、タガログ語、ネパール語、ミャンマー語、韓国朝鮮語、中国語各 1、+杏林大学院生中国語 2名

・研修内容：

1. 用語集作成の説明
2. 用語集作成検討(グループワーク)
3. 通訳練習；クイックレスポンス、
4. リプロダクション、ノートテイキングそれぞれについて講師が説明後、グループに別れて練習
5. 通訳者交流

●第3回「医療制度と通訳の役割」

- ・実施日時：
2024年11月4日（月祝）9：00～13：00
- ・受講者数：16名
- ・言語：
英語4、ベトナム語3、インドネシア語、ベトナム語/英語、シンハラ語/英語/ヒンディー語、タガログ語、ポルトガル語、ネパール語、ミャンマー語、韓国朝鮮語、中国語各1、杏林大学
院生15名
- ・研修内容：
 1. HIVに関係する保健医療制度
 2. 結核に関係する保健医療制度
 3. 外国籍住民が利用できる保健医療制度
 4. 理解を確認するためのテスト及び、回答内容から不足している知識のフォロー
 5. 医療通訳の倫理と役割
 6. 遠隔通訳

●第4回「医療通訳ロールプレイ演習」

- ・実施日時：
2024年12月7日（土）9：00～13：00
- ・受講者数：13名
- ・言語：
ベトナム語3、インドネシア語1、ミャンマー語1、見学；英語3、タガログ語、ネパール語、韓国朝鮮語、中国語、ベトナム語各1
- ・研修内容：
 1. HIV検査時、結果返し(陽性告知)場面での受検者と保健師の間の通訳(ロールプレイ)
 2. 通訳困難場面での対処方法の検討
 以上は感染症医療通訳研修の研修内容構成の全貌であるが、本報告では医療通訳技術を向上するための研修項目に焦点をあて、「医療通訳基礎トレーニング法演習」(2回目)及び「医療通訳ロールプレイ演習」(4回目)を取り扱う。

表1. 感染症医療通訳研修の内容構成

回	項目	内容	方法
第1回	感染症医療の基礎知識	1. HIVの基礎知識 2. 結核の基礎知識 3. HIV検査の流れ	Zoomによるリモート斉講義
第2回	医療通訳基礎トレーニング法演習	1. 用語集作成の説明 2. 用語集作成検討 3. 通訳練習：クイックレスポンス、 4. リプロダクション、ノートテイキング練習 5. 通訳者交流	Zoomによるリモート斉講義 ZoomBreakoutRoomsによるリモートグループワーク Zoomによるリモート斉講義 ZoomBreakoutRoomsによるリモートグループワーク
第3回	医療制度と通訳通訳の役割	1. HIVに関係する保健医療制度 2. 結核に関係する保健医療制度 3. 外国籍住民が利用できる保健医療制度 4. 理解を確認するためのテスト及び、回答内容から不足している知識のフォロー 5. 医療通訳の倫理と役割 6. 遠隔通訳	Zoomによるリモート斉講義
第4回	医療通訳ロールプレイ演習	1. HIV検査時、結果返し(陽性告知)場面での受検者と保健師の間の通訳(ロールプレイ) 2. 通訳困難場面での対処方法の検討	ZoomBreakoutRoomsによるリモートグループワーク

2. 医療通訳基礎トレーニング法演習の方法

医療通訳基礎トレーニング法演習は、医療通訳に必要なスキルを如何に身につけ、なおかつ日々向上していくかの方法論を紹介して、演習を通して習得してもらうのが狙いである。

過去の当該研修で参加者からよく聞かれる悩みは、「専門用語が覚えられない、訳せない」「先生や患者の言うことは覚えきれない」。そうした悩みを解消するには、通訳基礎トレーニング法の習得が効果的だと考える。専門用語の記憶は、用

語集の作成、クイックレスポンスによる強化記憶が効果的である。また、漏らさず正確に訳すにはリプロダクションやノートテイキングが必要不可欠な方法だと言える。これらの方法を効果的に活用するには、日ごろ練習することが重要である。従って、本年度は次の研修内容を実施した。

- ① 第1回の研修で受講したHIV・結核の基礎知識から専門用語を受講生自身がピックアップする。
- ② 専門用語集を作成し、講師に事前提出する。

エクセルか Word ファイルか手書きで作成するがは受講生に任せる。

- ③ 講師が受講生の提出された専門用語集について講評したうえで、用語集作成のノウハウを指導する。
- ④ 言語別グループワーク。お互いに作成した用語集を見て、良し悪しを検討する。また、現場での活用法を話し合う。
- ⑤ 講師によるクイックレスポンス練習法の解説とデモンストレーション
- ⑥ 言語別グループワークによる受講生のクイックレスポンスの実践演習
- ⑦ 講師によるリプロダクション練習法の解説とデモンストレーション
- ⑧ 言語別グループワークによる受講生によるリプロダクション演習
- ⑨ 講師による効果的なノートテイキングの解説とデモンストレーション
- ⑩ 言語別グループワークによる受講生によるノートテイキングの実践演習

3. 医療通訳ロールプレイ演習の方法

ロールプレイ演習には、3つの狙いがある。

- ① 現場経験のないもしくは不十分な参加者に現場を模擬体験することによって、自身の通訳能力や現場対応力の確認と向上を図る。
- ② 自分の通訳ぶりを講師や他の通訳仲間にみてもらい、評価してもらう。同時に、他の方の通訳ぶりを見学して、良いところを取り入れ、不足なところに気づくといった自己研鑽の資とする。
- ③ 参加者が日ごろ感じた通訳困難場面での対処方法について話し合い、より適切な対処法を検討する場とする。

本年度のシナリオは場面設定と日本語の表現の難易度に工夫を凝らした。場面設定は、HIV 検査時、結果返し(陽性告知)場面での受検者と保健師の間の通訳である。HIV 検査の種類と適切な時期、感染リスクや PrEP の服用に関する説明、確認検査の告知など実際現場で出会うであろう内容の詰まったシナリオに仕上げた。一方では、通訳研修の受講経験の少ない東南アジア言語ネイティブの参加者に考慮し、なるべくやさしい日本語を使用するよう工夫を加えた。

ロールプレイ演習は現場さながらの臨場感が大切で、実際通訳として現場に出ることを想定し

て、次のとおり各役割に対する指導要領を設定した。

- ① 参加者の事前準備
 - ・ ロールプレイ演習一週間前に、専門用語及び訳しづらいためであろう表現の日本語リストを参加者に配布
 - ・ 通訳言語への翻訳、クイックレスポンスの練習
- ② シナリオ進行役(スーパーバイザー)兼講師役、医療者役、患者役への事前準備
 - ・ 実際の医療現場さながらに進行するよう、シナリオの読み合いを工夫する。
 - ・ 専門用語や表現のクイックレスポンスで参加者の事前準備の状況をチェックし、指導を行う。
- ③ ロールプレイ演習の実施と評価
 - ・ 参加者が事前準備で覚えた専門用語や表現をスムーズに訳せたかを確認
 - ・ 参加者がノートテイキングを適切にできたかを確認
 - ・ 参加者が聞き取れなかったり、覚えきれなかったときに、聞き返したり、確認してから訳すことはできたかを確認
 - ・ 医療者や患者の長い話を適切に止めて訳すことができたかを指導
 - ・ 参加者の相互学習を促す。

上記の流れで3言語別(ベトナム語、インドネシア語、ミャンマー語)のグループに分かれてロールプレイ演習を実施した。演習の最後に3言語のグループの状況を全体で報告してもらい、参加者全員で演習の成果を共有した。

4. 評価方法

各研修の有効性に対する評価を確認するため、研修参加者に対し、研修に関するアンケート調査(別紙1、2)を実施した。アンケートは半構造的質問形式で、有効性の程度の評価を収集した。アンケートは Forms を利用したオンラインによるアンケート配信と集計で、研修当日ではなく、後日のアンケート集計となったため、参加者の全数の集計とはならなかった。

ロールプレイ演習の評価は、これまでの研修では、通訳に求められる基本的能力を正確性と迅速性の両軸から捉える評価法を採用していたが、本年度は東南アジア言語ネイティブの方を優先する研修であることを踏まえて、通訳の正確性、完全性と一貫性に重点を置く評価方法を用いた。評

価は具体的に評価シートを用いて三段階評価に設定して実施した。（表 2）

段階 1：通訳能力不十分

段階 2：まずまずの出来映え（及第）

段階 3：よくできました（優秀）

表 2 評価シート

評価項目	内 容	段階1 不十分	段階2 及第	段階3 優秀
事前準備	事前準備の効果があったか（クイックレスポンスで確認）			
専門性	専門用語は正確に訳せたか			
正確性	数詞、数量詞が正確に訳せたか			
完全性	訳し漏れがあったか			
忠実性	曖昧な表現をわかりやすく的確に訳せたか			
一貫性	フレーズの前後の関連性を正確に訳せたか			
語訳	誤訳がなかったか			
文法	文法的な間違いがなかったか			
通訳要領	メモを適切に取れたか			
	通訳に入るタイミングや適宜中断してもらうことができたか			
	確信持てない時に確認してから訳したか			
	受検者の不安や心配に寄り添った訳ができたか			
特記事項				

（倫理面への配慮）

すべてのアンケート調査は、当研究班代表者が所属する杏林大学大学院国際協力研究科の研究倫理委員会から承認を得ている。

C. 研究成果

1. 研修参加者の属性

通訳基礎トレーニング演習とロールプレイ演習の研修参加者の属性について、下記の表にまとめた（表 3）。なお、アンケートの回答は参加者全員とはならなかったため、表は有効回答のみでまとめたものである。

参加者の性別内訳を見ると、圧倒的に女性が多い。年齢は 20 代から 60 代以上にわたり、幅広い年齢層からの参加を得た。もっとも多い年齢層が 30 代と 60 代以上で、30 代の参加者が多いことは良い兆候と受け止めてられる。学歴から見れば、大学卒、大学院卒が最も多く、医療通訳未経験者や経験年数浅い方の参加が多いこともわかった。また、医療通訳ニーズの高いベトナム語の参加者が多いことが評価される。

2. 通訳基礎トレーニング法演習の成果

研修後のアンケートを通して、講義と演習によって研修参加者の通訳基礎トレーニング法に対する認識が前進したかどうかを確認した（表 4）。

研修後のアンケート調査の集計からわかったこととして、多くの参加者が研修前に既に通訳基礎トレーニング法を習得し、習慣化されているとはいえず、研修によって以下の学びの効果が認められた。

・「用語集の作り方を知らない」「聞いたことがある」は 33.3%で、「多少作ったことがある」が 55.6%に対し。用語集作成練習の有効性は、「強くそう思う」61.1%、「そう思う」33.3%で 9 割以上に達した。

・「クイックレスポンス技法は知らない」が 22.2%、「聞いたことがある」と「多少練習したことがある」それぞれ 38.9%に対し、「クイックレスポンス練習の有効性」は「強くそう思う」と「そう思う」がそれぞれ 44.4%で、9 割弱の参加者が練習の効果を認めた。

・リプロダクション技法は「知らない」が 33.3%、「聞いたことがある」が 27.8%、「多少練習したことある」38.9%に対し、リプロダクション練習の有効性は「強くそう思う」が 44.4%、「そう思う」50.0%で、9 割以上の参加者が効果を認めた。

・ノートテイキングのノウハウは「知らない」が 11.1%、「聞いたことがある」が 16.7%、「多少練習したことある」33.3%、「通訳するときに必ずメモをとる」が 38.9%に対し、ノートテイキング練習の有効性は「強くそう思う」が 56.6%、「そう思う」が 38.9%で 95.5%の参加者が有効だと評価した。

・研修を通して「ノートテイキングできるようになったこと」は、専門用語が 88.9%、数字単位が 83.3%、動詞が 44.4%、固有名詞が 66.7%、忘れるかもしれない単語が 33.3%、かなりの成果が見られた。「未だ取れるようになっていない」が 11.1%に留まった。

表3 研修参加者のプロフィール

		CHARM	
		通訳基礎	ロールプレイ
		18	14
性別	男	2	1
	女	16	13
	その他	0	
年齢	20才未満	0	0
	20～29才	2	1
	30～39才	6	5
	40～49才	2	2
	50～59才	3	3
	60才以上	5	3
学歴	高校卒	1	1
	大学卒	11	8
	大学院卒	4	3
	その他	2	2
所属 (複数所属含む)	民間企業	1	1
	国際交流協会	5	4
	NPO団体	6	7
	自治体	3	3
	その他の団体		2
	なし	6	3
日本在住 年数	0～2年未満	1	0
	2～5年未満	1	0
	5～10年未満	3	3
	10～20年未満	4	3
	20年以上	1	3
	日本で育った	8	5
医療通訳従事者	登録・従事	6	7
	研修済・未従事	3	1
	未研修・従事	7	3
	登録・未従事	2	2
	未研修・未従事	0	1
医療通訳 経験	ない	7	4
	1年未満	8	9
	5年未満	0	0
	5～10年未満	2	1
結核患者 通訳経験	ない	13	8
	ある	5	6
HIV患者 通訳経験	ない	17	13
	ある	1	1
担当言語 (複数言語 対応者含む)	英語	6	4
	中国語	2	1
	韓国語	1	1
	ベトナム語	5	5
	ネパール語	1	1
	フィリピン語	2	1
	ミャンマー語	2	1
	インドネシア語	2	1

表4 通訳基礎トレーニング法演習の有効性

属 性	効 果	CHARM参加者合計
		18 割合%
「用語集」 作り方を知っていたか	知らない	2 11.1
	聞いたことがある	4 22.2
	多少作ったことある	10 55.6
	よく作っている	2 11.1
今まで「用語集」 どんな方法で作っているか	ノートで手書き	5 27.8
	パソコン	11 61.1
	タブレット	1 5.6
	スマホ	1 5.6
「用語集」作成練習 練習の有効性	強くそう思う	11 61.1
	そう思う	6 33.3
	どちらかといえばそう思う	1 5.6
	どちらかといえばそう思わない	0 0.0
「クイックレスポンス」 技法を知っていたか	知らない	4 22.2
	聞いたことがある	7 38.9
	多少練習したことある	7 38.9
	よく練習している	0 0.0
「クイックレスポンス」 練習の有効性	強くそう思う	8 44.4
	そう思う	8 44.4
	どちらかといえばそう思う	1 5.6
	どちらかといえばそう思わない	1 5.6
「リプロダクション」 技法を知っていたか	知らない	6 33.3
	聞いたことがある	5 27.8
	多少練習したことある	7 38.9
	よく練習している	0 0.0
「リプロダクション」 練習の有効性	強くそう思う	8 44.4
	そう思う	9 50.0
	どちらかといえばそう思う	1 5.6
	どちらかといえばそう思わない	0 0.0
「ノートテーク」 ノウハウを知っていたか	知らない	2 11.1
	聞いたことがある	3 16.7
	多少練習したことある	6 33.3
	通訳するときに必ずメモをとる	7 38.9
「ノートテーク」 練習の有効性	強くそう思う	10 55.6
	そう思う	7 38.9
	どちらかといえばそう思う	1 5.6
	どちらかといえばそう思わない	0 0.0
「ノートテーク」 できるようになったこと (複数選択可)	専門用語	16 88.9
	数字単位	15 83.3
	動詞	8 44.4
	固有名詞	12 66.7
リモートによる研修と 対面研修の効果比較	未だ取れるようになっていない	2 11.1
	忘れるかもしれない単語	6 33.3
	とても効果的	9 50.0
	効果的	4 22.2
リモート研修のメリット (複数選択可)	変わらない	3 16.7
	困難	2 11.1
	とても困難	0 0.0
	移動等時間ロスがない	16 88.9
リモート研修のデメリット (複数選択可)	リラックスして集中しやすい	12 66.7
	遠隔でも参加可能	12 66.7
	感染リスクない	4 22.2
	グループ分けが容易	8 44.4
リモート研修のデメリット (複数選択可)	チャット機能は便利	4 22.2
	通信環境不安定	8 44.4
	通信機器使い慣れない	2 11.1
	意見交換困難	6 33.3
	参加者間の交流困難	9 50.0
	集中力持続困難	1 5.6
	質問困難	2 11.1

3. ロールプレイ演習の成果

ロールプレイ演習の成果はアンケート調査の回答とスーパーバイザーの評価の二つの側面から確認する。

(1) アンケート調査の回答結果

研修後のアンケートを通して、ロールプレイ演習の有効性を研修参加者がどのように評価したかを確認した（表5）。

表5 ロールプレイ演習の有効性

属 性	効 果	CHARM※参考合計	割合%
研修の流れ	とても良い	9	64.3
	良い	4	28.6
	普通	0	0.0
	悪い	1	7.1
	とても悪い	0	0.0
専門用語を訳せるようになったか？	強くそう思う	6	42.9
	そう思う	7	50.0
	どちらかといえばそう思う	1	7.1
	どちらかといえばそう思わない	0	0.0
	まったく思わない	0	0.0
通訳の入るタイミングをわかるようになったか？	強くそう思う	4	28.6
	そう思う	9	64.3
	どちらかといえばそう思う	0	0.0
	どちらかといえばそう思わない	1	7.1
	まったく思わない	0	0.0
確認したい時に聞き返すことができるようになったか？	強くそう思う	7	50.0
	そう思う	6	42.9
	どちらかといえばそう思う	0	0.0
	どちらかといえばそう思わない	1	7.1
	まったく思わない	0	0.0
長い話を止めて通訳することができるようになったか？	強くそう思う	4	28.6
	そう思う	9	64.3
	どちらかといえばそう思う	1	7.1
	どちらかといえばそう思わない	0	0.0
	まったく思わない	0	0.0
メモ取りのノウハウがわかるようになったか？	強くそう思う	3	21.4
	そう思う	9	64.3
	どちらかといえばそう思う	2	14.3
	どちらかといえばそう思わない	0	0.0
	まったく思わない	0	0.0
他の参加者のパフォーマンスは参考になったか？	強くそう思う	5	35.7
	そう思う	5	35.7
	どちらかといえばそう思う	3	21.4
	どちらかといえばそう思わない	1	7.1
	まったく思わない	0	0.0
医療者発話と患者発話の通訳困難度比較	医療者の発話の通訳がずっと難しい	4	28.6
	どちらかといえば医療者の発話の通訳が難しい	4	28.6
	どちらも同じ程度に難しい	5	35.7
	どちらかといえば患者の発話の通訳が難しい	1	7.1
	患者の発話の通訳がずっと難しい	0	0.0
現場に出る自信がついたか？	強くそう思う	2	14.3
	そう思う	9	64.3
	どちらかといえばそう思う	2	14.3
	どちらかといえばそう思わない	1	7.1
	まったく思わない	0	0.0
ロールプレイ実演の遠隔通訳と対面通訳の効果比較	遠隔通訳がとても効果的	6	42.9
	遠隔通訳が効果的	1	7.1
	変わらない	0	0.0
	遠隔通訳が困難	7	50.0
	遠隔通訳がとても困難	0	0.0
リモート研修によるロールプレイ実演のメリット（複数選択可）	移動等時間ロスがない	13	92.9
	リラックスして集中しやすい	5	35.7
	遠隔でも参加可能	13	92.9
	感染リスクない	4	28.6
	グループ分けが容易	5	35.7
リモート研修によるロールプレイ実演のデメリット（複数選択可）	チャット機能は便利	4	28.6
	通信環境不安定	5	35.7
	通信機器使い慣れない	0	0.0
	意見交換困難	6	42.9
	参加者間の交流困難	10	71.4
	集中力持続困難	2	14.3
	質問困難	1	7.1

上記の表で示された通り、

- ・研修の流れは「とても良い」64.3%、「良い」28.6%を合わせると、9割以上の参加者が評価した。
- ・「専門用語を訳せるようになったか」は「強くそう思う」42.9%、「そう思う」50.0%で、9割以上の参加者が成果を実感した。
- ・「通訳に入るタイミングをわかるようになったか」は「強くそう思う」28.6%、「そう思う」64.3%で、9割以上の参加者が効果を認めた。
- ・「確認したいときに聞き返すことができるようになったか」は「強くそう思う」50.0%、「そう思う」42.9%で、9割以上の参加者ができたと実感した。
- ・「長い話を止めて通訳することができるようになったか」は「強くそう思う」28.6%、「そう思

う」64.3%で、9割以上の参加者ができたと実感した。

・「メモ取りのノウハウがわかるようになったか」は「強くそう思う」21.4%、「そう思う」64.3%で、85.7%の参加者が評価した。

・「他の参加者のパフォーマンスは参考になったか」は「強くそう思う」35.7%、「そう思う」35.7%で71.4%の参加者が積極的に評価した。

・「現場に出る自信がついたか」は「強くそう思う」14.3%、「そう思う」64.3%で、78.6%の参加者から自信がついたと評価した。

・遠隔通訳が「とても効果的」42.9%、「効果的」7.1%、50%がポジティブな評価をした。前年度7割の高評価より下がる結果になった。遠隔通訳が困難と回答したのは50%に上った。

・遠隔通訳が効果的と評価したポイントとして、「移動等時間ロスがない」92.9%、「遠隔地でも参加可能」92.9%、「リラックスして集中しやすい」35.7%、「グループ分けが容易」35.7%、「感染リスクがない」28.6%などが挙げられた。参加のしやすさがもっとも評価されたことがわかった。

・遠隔通訳が困難だと感じた理由としては、「参加者の意見交換困難」71.4%、「意見交換困難」42.9%と続いた。リモートの機能面で「通信環境不安定」が35.7%が挙げられた。講師と参加者、参加者間の交流が課題であることが浮き彫りになった。

(2) スーパーバイザーによる評価

ロールプレイ演習はベトナム語、インドネシア語、ミャンマー語の3つのグループに分けて実施した。各グループのスーパーバイザーの評価を下記の表6にまとめた。

・用語集の作成練習や、ロールプレイ演習の一週間前にクイックレスポンス用資料を配布するなど、事前準備の効果が一定程度に見られた。

・ベトナム語の参加者1名はほぼすべての項目において3段階評価の2を取って、ミャンマー語の参加者1名は2と3を取った。演習の成果が見られた。しかし、他の3名は1の評価が眼立った。事前準備や通訳スキルが不十分だとスーパーバイザーから指摘されたように、通訳基礎トレーニング法のさらなる習得と習慣化が課題だと考える。

・通訳人材を確保するためには、現状ではこのよ

うな通訳訓練を受けていない以上に外国語能力の向上が必要な参加者を取り込まざるを得ない。それゆえ、初級レベルの丁寧な指導ができるプログラムを開発し、定期的に研修を行うことが大切だと考える。

表6 スーパーバイザーによる評価

通訳言語	評価項目	ベトナム語			インドネシア語	ミャンマー語
		参加者1	参加者2	参加者3	参加者4	参加者5
事前準備	事前準備の効果があったか(クイックレスポンスで確認)	2	2	2	2	2
	専門用語は正確に訳せたか	2	2	1	1	2
	正確性 敬語、敬称が正確に訳せたか	2	1	1	1	2
	完全性 訳し漏れがあったか	2	1	1	1	2
	忠実性 曖昧な表現をわかりやすく的確に訳せたか	2	2	1	1	3
翻訳	一貫性 フレーズの前後の関連性を正確に訳せたか	2	2	1	1	2
	誤訳 訳語がなかったか	2	1	1	1	3
	文法 文法的な間違いがなかったか	2	1	1	1	3
通訳要領	メモを適切に取れたか	2	2	1	1	2
	通訳に入るタイミングや適宜中断してもらうことができたか	2	2	1	1	3
	確信持てない時に確認してから訳したか	2	2	1	1	3
	受検者の不安や心配に寄り添った訳ができたか	1	2	1	1	2

D. 考察

本年度の研修の課題提出、講義中のパフォーマンス及びアンケート調査の回答から以下の課題を洗い出した。

1. 研修内容の課題

・用語集の作成をマニュアル化する必要がある。用語集の作成を提出課題として出した。結果は英語3名、ベトナム語4名、インドネシア語1名、ミャンマー語1名、中国語1名、韓国語1名、計11名で、提出率は61%である。未提出者は用語集の作り方がわからないとしている。アンケート調査の回答から用語集をよく作っていると答えたのは11.1%の2人だけに留まった。

・通訳基礎技法トレーニングの習慣化が課題である。専門用語の記憶に欠かせないとされているクイックレスポンスの練習法は6割以上、強化記憶に役に立つリプロダクション練習法は6割、通訳に不可欠なノートテイキングは約3割「知らない」、「聞いたことがある」程度と回答した。通訳基礎スキルの習得にトレーニングの習慣化が課題であることが明らかになった。

2. 遠隔研修に残る課題

・遠隔通訳研修が困難だと感じる理由は、講師と参加者、参加者間の交流の困難さが最も多く指摘されている。リモート研修に伴うコミュニケーションの困難さであり、遠隔通訳の現場でも同じ難しさが存在すると推測できる。本年度研修では、

コミュニケーションにとって場の共有が不可欠であるとして、成果の共有などの場(時間)を設けたが、不十分と認識せざるを得ない。さらなる工夫が必要であると考ええる。

3. 人材不足のアジア言語の医療通訳者養成について

・医療現場の通訳者不足を踏まえると、通訳者の裾野を広げると質の向上をともに可能にする研修プログラムのさらなる開発が必要だと考える。現在は限定された時間内で行ってきたが、今後は事前に通訳経験や通訳訓練の有無などのアンケート調査を実施し、レベル別・言語別の実施ができればより効果的な研修が実現できると考える。

・人材不足のアジア言語の参加者には初級的な研修レベル構成が大切だと感じている。今後初級・中級とレベルを分けて実施できるプログラムの開発に力を入れたいと考える。

E. 結論

本年度は近年増加している多様な言語に対応できる人材を養成するために日本語以外の言語を母語とする人々が参加しやすいプログラムを目指した。特に医療通訳ニーズが高いが、人材不足で悩む東南アジアの3言語、ベトナム語、インドネシア語、ミャンマー語に絞ってロールプレイ演習を実施した。

通訳基礎トレーニング法演習は用語集の作成からノートテイキングのノウハウなど、一連の練習方法を習得し、日頃自主トレーニングする習慣を身につけることを目標としている。その結果、基礎トレーニング法の習得は一定の成果があり、有効性を確かに実感してもらえた。

ロールプレイ演習は通訳現場を体験し、自身の通訳の改善点を確認し、改善方法を理解することによって、現場に出る自信をつけてもらうことを目標としている。実施言語を絞ったため参加者が少数であり、現場に出る自信をある程度持てるようになったかは個人差があると言わざるを得ないが、現場対応の手がかりを与えることになったものと推測される。

重要なことは、通訳基礎トレーニング法の習得と練習の習慣化は継続してこそ通訳力につながる。このような研修の定期的な実施で、通訳力向上の訓練法を普及させることが医療通訳者

養成に必要かつ有効な方法だと考える。

参考文献

- 1) 日本政府観光局報道発表資料(2025 年 1 月 15 日)
https://www.jnto.go.jp/statistics/data/_files/20250115_1615-1.pdf
- 2) 出入国管理統計 出入(帰)国者数 速報値 月次 2024 年 12 月 | ファイル | 統計データを探す | 政府統計の総合窓口
- 3) (公財)エイズ予防財団「令和 5 (2023) 年エイズ発生動向」r05gaiyo.pdf
- 4) 北島勉、他(2022)『外国人に対する HIV 検査と医療サービスへのアクセス向上に関する研究』令和 3 年度総括・分担研究報告書(厚生労働省・科学研究費補助金エイズ対策研究事業)

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

(論文)

なし

(発表)

- 1) 宮首弘子・沢田貴志・北島勉・Tran Thi Hue・青木理恵子・飯島佐智子・草間久美. 通訳基礎技術とロールプレイ演習を含む感染症医療通訳研修の取り組み (ポスター発表). 第 38 回日本エイズ学会学術集会・総会. 2024 年 11 月 29 日. 京王プラザホテル (東京都新宿区)
- 2) 宮首弘子. 感染症医療通訳研修における通訳基礎トレーニングとロールプレイ演習の取り組みー北島研究班の活動よりー. 日中翻訳文化教育協会成立 10 周年国際学術シンポジウム (基調講演). 2024 年 12 月 8 日. 城西国際大学紀尾井キャンパス (東京都千代田区)

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

